



評価懸念研究の動向と今後の展望：その形成プロセスに着目して

著者	臼倉 瞳, 濱口 佳和
雑誌名	筑波大学心理学研究
号	48
ページ	49-58
発行年	2014-08-25
その他のタイトル	A literature review about fear for negative evaluations : Focusing on its developmental processes
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123479

評価懸念研究の動向と今後の展望

—その形成プロセスに着目して—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 臼倉 瞳

筑波大学人間系 濱口 佳和

A literature review about fear for negative evaluations: Focusing on its developmental processes

Hitomi Usukura (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8577, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8577, Japan*)

The purpose of this paper is to review current research concerning fear for negative evaluations, with a particular focus on its developmental processes. First, we review studies of fear for negative evaluations from four domains, and find research from the perspective of fear prevention to be particularly important. However, to date there have been relatively few practical studies into the influencing factors and the developmental processes behind fear for negative evaluations. Accordingly, we introduce some developmental models of social anxiety and social anxiety disorder, which provide some meaningful hints for creating a model of fear for negative evaluations. Finally, we discuss some directions for future research.

Key words: fear for negative evaluations, social anxiety, social anxiety disorder, model of developmental process

はじめに

内閣府（2000）が中学生と高校生を対象に行った調査によると、「周囲の人（友達）から誤解されているのではないかと心配になる」と回答した者は6割、「友だちが自分のことをどのような人間だと思っているか気になる」と回答した者は7割に上る。さらに、同様の内閣府（2010）の調査では、半数以上が「友達や先生の目が気になる（なった）」という文章が自分の性格に当てはまると回答している。このような懸念の増加は、正常な発達の一部であると考えられているが（Ollendick, King, & Frary, 1989）、周囲からどう思われているかを気にする傾向や他者からの否定的な評価を恐れる傾向が極端に強まると、対人不安傾向が高まるほか、社交不安障

害に陥る可能性もある。この対人不安の中核的な概念（Leary, 1983a 生和訳 1990）であり、かつ社交不安障害の背景にある（Rapee & Heimberg, 1997）とされるのが評価懸念（fear of negative evaluation）である。評価懸念は、「他者からの否定的な評価に対する心配、および否定的に評価されるのではないかとという予測に対する不安の程度」（Watson & Friend, 1969, p.449）と定義されている。

評価懸念に関する先行研究を整理すると、①測定尺度の作成に関するもの（石川・佐々木・福井, 1992; La Greca & Lopez, 1998; La Greca & Stone, 1993; Watson & Friend, 1969）、②性差や年齢的变化について検討したもの（Hartmann, Zahner, Pühse, Schneider, Puder, & Kriemler, 2010; Warren, Good, & Velten, 1984）、③適応指標との関連につい

て検討したもの (Kocovski & Endler, 2000; O'Connor, Berry, Weiss, & Gilbert, 2002), ④ 評価懸念の形成に関連および影響する要因について検討したもの (Koydemir-Özden & Demir, 2009; Teachman & Allen, 2007; 山本・田上, 2003) の4つに大別することが可能であると思われる。特に、評価懸念の形成要因を明らかにすることは、社交不安障害などへの病理化や心理社会的な不適応問題へ至ることを防ぐという予防的観点から、研究の蓄積が求められる重要な領域である。しかし、この領域に関する先行研究は、対人不安や社交不安障害に関して検討されたものが多く、評価懸念に関する知見は少ないという現状がある。

では、形成要因よりさらに視点を広げた形成プロセスに着目した研究の動向はどうだろうか。不安症状の生起メカニズムについては、成人を対象とした研究を中心に複数の有力なモデルが提唱されてきた (Clark & Wells, 1995; Leary, 1983a 生和訳 1990; Rapee & Heimberg, 1997)。また、子どもの不安障害についても、その認知的プロセスを記述するモデルが提唱されている (Daleiden & Vasey, 1997)。しかし、これらのモデルは、社会的状況においてまさに生じる認知行動的プロセスを扱ったものであり、そもそもどのような発達の過程を経て対人不安傾向が形成されるのかについて説明するモデルではない。

なお、Appleton (2008) は、子どもの不安障害を理解するための発達の観点を整理し、子どもの不安障害は単一の原因によって生じるのではなく、発達の過程で経験される様々な要因によって生じること、学校などの社会的文脈も考慮する必要があること、発症に関して両親や仲間が重要な役割を果たしていることなどを指摘している。しかし、対人不安や社交不安障害に関する先行研究においても、複数の要因を取り上げてその形成プロセスの記述を試みた研究は限られており、評価懸念に関してはなおさら検討が不十分である。したがって、評価懸念の形成プロセスを理解するためには、まずは先行研究で明らかにされている知見を整理することが必要だろう。

そこで本稿では、評価懸念に関する研究の動向について前述した4つの領域から概観する。続いて、発達の観点から提唱された対人不安や社交不安障害の形成プロセスに関するモデルを整理する。これらのモデルは、評価懸念の形成プロセスを考える上で有用な示唆を与えてくれるだろう。最後に、今後の課題や展望を述べることにする。

評価懸念の概念的特徴と測定尺度

評価懸念の概念的位置づけとその特徴

Watson & Friend (1969) によると、評価懸念は社会的評価不安 (social-evaluative anxiety) の構成要因の1つである。社会的評価不安とは、①社会的状況における苦痛、不快感、恐怖、不安などの程度、②社会的状況における意図的な抑制行動や回避行動、③他者から否定的な評価を受けることに対する恐れ、という3つの下位概念から構成される概念である。①と②にあたる「社会的状況における苦痛および社会的状況における抑制行動や回避行動」は 'Social Avoidance and Distress scale' (以下 SAD とする)、③にあたる「他者から否定的な評価を受けることに対する恐れ」は 'Fear of Negative Evaluation scale' (以下 FNE とする) として尺度化されている (Watson & Friend, 1969)。

また、評価懸念の特徴として、山本・田上 (2001a) は、聴衆の面前に立つ場合や知らない人と接する場合などの直接的な対人場面に限らず、それを予測したり回想することによっても生じることから、面前に他者が存在するかしないかといった状況の違いはあまり関係がないことを指摘している。さらに、他者に否定的に評価される材料を与えてしまったかどうか分からない場合や、客観的に考えると不安を感じる理由は何もない場合でさえも生じるものであるという (山本・田上, 2001a)。

なお、評価懸念は対人不安の中核的な概念であるとされているが (Leary, 1983a 生和訳, 1990)、対人不安の測定に評価懸念を測定する尺度が使われるなど、対人不安と評価懸念に関して明確な区別がなされていないのが現状である。対人不安 (social anxiety) の定義は、「現実あるいは想像上の対人場面において、他者から評価を受けたり、それを予測したりすることによって生じる不安」 (Schlenker & Leary, 1982)、「人前に出たときに感じる不快感」 (Buss, 1986 大淵訳 1991) など様々であり、その使われ方は研究者間で必ずしも一致している訳ではない (菅原, 1996)。一方、評価懸念は、対人不安以外の不安障害 (Oei, Kenna, & Evans, 1991) や、不安障害以外の精神疾患 (Kinoshita, Kingdon, Kinoshita, Kinoshita, Saka, Arisue, Dayson, Nakaaki, Fukuda, Yoshida, Harris, & Furukawa, 2011) との関連も指摘されている。このことから、評価懸念は単なる対人不安の下位概念にとどまらない多様な不適応問題を説明することができる可能性のある概念であると言える。さらに、評価懸念が回避行動の頻度や不快経験の有無とは明確に区別される一方で

(Watson & Friend, 1969). 対人不安という概念には複雑に関連しあう次元(感情・認知・行動)が混在している(山本・田上, 2007)。つまり, “気がかり”や“心配”といった認知的な不安の程度(山本・田上, 2001a)である評価懸念と、感情・認知・行動という複数の次元から捉えられる対人不安とは、扱っている次元の違いという点で弁別可能であると思われる。Spence (1994) は、行動と感情は認知により決定づけられており、行動と感情の変化は認知の変容によって生じると主張しており、認知的な不安の程度を表す評価懸念を取り上げることが、不安にまつわる行動や感情の理解や変容にも役立つ可能性があるだろう。

評価懸念の測定尺度

先行研究で用いられる評価懸念の測定方法の多くは、質問紙法である。質問紙法で用いられる尺度は、大学生や成人を対象にしたものと、小学生から高校生までの児童・生徒を対象にしたものの大きく2種類に分けられる。

FNE (Watson & Friend, 1969) は、大学生を対象に作成された1因子構造、30項目の尺度であり、各国で翻訳・標準化されている。石川他(1992)によって作成された日本語版は、原版同様の1因子構造であることが確認されたほか、2週間間隔をおいた再検査信頼性は $r=.76$ であり、基準関連妥当性も確認されている。また、Leary (1983b) は12項目の短縮版 FNE (‘Brief Fear of Negative Evaluation scale’; 以下 BFNE とする) を作成しており、FNE との強い正の相関($r=.96$)や、4週間後の良好な再検査信頼性($r=.75$)が得られている。日本語版 BFNE でも、二母数正規累積モデルと段階反応モデルによって尺度の信頼性の高さと識別力の高さが確認されている(笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野, 2004)。

児童・生徒を対象とした評価懸念の測定尺度としては、まず La Greca & Lopez (1998)、La Greca & Stone (1993) が挙げられる。社会的評価不安(social-evaluative anxiety)を測定する FNE と SAD を児童期用と青年期用に修正したものであり、児童期用(適用年齢6~12歳)は ‘Social Anxiety Scale for Children-Revised’ (La Greca & Stone, 1993; 以下 SASC-R とする)、青年期用(適用年齢12~18歳)は ‘Social Anxiety Scale for Adolescents’ (La Greca & Lopez, 1998; 以下 SAS-A とする)と呼ばれている。海外では、児童期および青年期の評価懸念を測定する際に FNE のみを使用することがある(Hartmann, et al., 2010; La Greca, Dandes, Wick,

Shaw, & Stone, 1988)。日本語版は岡島・福原・山田・坂野・La Greca (2009) によって作成されており, 「他者からの否定的な評価に対する恐れ」, 「新しい状況や人に対する回避とディストレス」, 「一般的回避とディストレス」の3因子構造である。岡島他(2009)によれば, 「他者からの否定的な評価に対する恐れ」の Cronbach の α 係数は、SASC-R では $\alpha=.91$, SAS-A では $\alpha=.89$ であり、2週間後の再検査は、SASC-R では $r=.78$, SAS-A では $r=.76$ であった。また、併存的妥当性、弁別的妥当性に関しても十分な値が報告されている(岡島他, 2009)。

また、本邦で独自に開発された評価懸念に関する尺度もいくつか挙げられる。小学校5、6年生を対象に作成された児童用評価懸念尺度(岡田・渡田, 1992)は, 「否定的な評価の懸念・回避」と「評価場面の意識・懸念」の2因子構造、16項目の尺度である。Cronbach の α 係数は、第1因子が $\alpha=.77$, 第2因子が $\alpha=.78$ と概ね高い値が得られている。妥当性に関しては、評価懸念得点の高い群ほど、Y-G 性格検査の一部(社会的外向、のんかさ、神経質)を用いて算出された不適応感得点が高くなることで確認されている。山本・田上(2001b)が中学生を対象に作成した評価懸念尺度は1因子構造、10項目の尺度であり、 $\alpha=.87$ と高い内的整合性が確認されている。また、特性不安と状態不安との間に正の相関(それぞれ $r=.66$, $r=.38$)が得られており、一定の妥当性が確認されている。なお、小学校5、6年生、中学生、高校生3つの学校段階を対象に評価懸念尺度の信頼性と妥当性を検討した山本・田上(2007)では、小学生では $\alpha=.85$, 中学生では $\alpha=.87$, 高校生では $\alpha=.86$ と高い内的整合性が確認されており、妥当性については、いずれの学校段階においても特性不安と状態不安との間に正の相関が得られている。また、中学生では約3ヶ月間隔をおいた再検査信頼性についても $r=.73$ と高い値が得られている。

以上のように、海外では、成人用として評価懸念を単独で測定する尺度が開発されているほか、児童・青年用は、社会的評価不安(social-evaluative anxiety)の測定尺度の一下位尺度として開発されている。本邦では、海外の尺度の翻訳版に加え、独自に開発された児童・生徒用の評価懸念尺度が存在している。多くの尺度では、評価懸念自体は単一の特性として位置づけられており、多面的な構造を持った構成概念として測定はされていないと言えるだろう。

評価懸念の性差と発達的变化

性差に関しては、調査対象者の発達段階によって結果が異なっている。調査対象者が大学生の場合、女性の方が評価懸念の得点が高いという結果が得られる一方で (Watson & Friend, 1969)、男女間で有意な差が見られなかったという結果も得られている (石川他, 1992; Turk & Heimberg, 1998)。一方、児童・思春期においては、女兒の方が男児よりも評価懸念が高いという結果が一貫して見られている (Hartmann et al., 2010; La Greca et al., 1988; 岡田・渡田, 1992; 岡島他, 2009; 山本・田上, 2007)。つまり、児童・思春期においては性差が明確に確認されており、この傾向は海外でも本邦でも一貫して見られるものであると考えられる。

発達の変化に関しては、まず、評価懸念が生起する時期はいつなのかという問題が論じられてきた。しかし、McClure & Pine (2006) や Morris & Ale (2011) によると、評価懸念が最初に生起する時期は、明確には明らかにされていない。そもそも、一般的な不安や恐怖は、思春期になるにつれて減少するとされるが (Gullone, King, & Ollendick, 2001)、社会的状況における不安のみは異なる発達のパターンをたどると言われている (McClure & Pine, 2006)。つまり、幼少期の社会的状況における不安の背後には分離不安が見られるが、児童期中期以降はその頻度と強度が徐々に減少していき、思春期になると、分離不安に代わり評価に対する懸念が見られるようになる (McClure & Pine, 2006)。そして、他者の評価に対する過剰な不安意識は高校から大学にかけて減少していくという (堀井・卯月・小川, 1995)。自己意識と認知能力の発達の観点から、評価懸念の生起時期を推察することも可能であろう。柏木 (1983) は、自分の直接的な経験だけに根差した自己像である「行為の主体としての自己」から、他者から自分がどうみられているかを把握することが可能になる自己の客体化が起こるとし、子どもが自分の主観にだけ頼った一方的な判断から、自己を客体化し客観的に認知できるようになるのは小学校高学年頃であるとしている。また、Phillips (1963) も、小学校3年生よりも小学校6年生の方が自己評価と他者評価が一致する傾向にあることを明らかにしている。したがって、評価懸念が生起する時期は、小学校高学年頃であると考えられる。

なお、年齢に伴う評価懸念の量的変化に関しては、小学校から高校生を対象にした検討がなされている。小学校2～6年生を対象にした La Greca et al. (1988) は、学年間で評価懸念得点に有意な差が

見られなかったことから、評価懸念は小学校時代を通じて変化せずに一貫して見られる社会不安の認知的側面であると指摘した。さらに、中学生を対象にした Warren et al. (1984) も学年間で有意な差が見られなかったことを報告している。このように、欧米では学年間差についての検討がされてきたが、本邦では学校段階差に焦点を当てた検討がなされてきた。小学校5年生から高校3年生までの児童・生徒を対象に学校段階ごとの評価懸念の高さを検討した山本・田上 (2007) は、小学校高学年よりも中・高生の方が評価懸念得点が有意に高いことから、評価懸念が小学校高学年から中学生にかけて増加する傾向にあると推察している。Westenberg, Drews, Goedhart, Siebelink, & Treffers (2004) も、児童期後期から思春期にかけて、自己意識の確立や認知能力の発達を背景に他者からの否定的な評価に対する不安が増加すると述べていることから、山本・田上 (2007) の指摘は現実に即したものである可能性があるだろう。

評価懸念と適応指標との関連

評価懸念と適応指標との関連に関しては、青年期以降の調査対象者を中心に、社交不安障害のほか、パニック障害や全般性不安障害などの他の不安障害 (Oei et al., 1991)、抑うつ (Collins, Westra, Dozois, & Stewart, 2005; O'Connor et al., 2002)、摂食障害 (Gilbert & Meyer, 2005)、自尊心の低さ (Kocovski & Endler, 2000) などとの関連が明らかにされている。また、児童期を対象にした研究では、ソシオメトリック法における拒否児や無視児の地位 (La Greca et al., 1988)、自己価値観の低さ (La Greca & Stone, 1993) との正の関連が見られている。

上記のように、心理的不適応の指標との関連を示す一方で、評価懸念の高さは適応的側面を持つとも言われている。不安障害の子どもの行動特徴を検討した Kendall, Krain, & Treadwell (1999) は、全般性不安障害の子どもは“小さな大人”のようであり、締め切りや約束を守り、規則に従順であるなどの行動特徴を示すとした。同様の指摘は本邦でも見られ、岡田・渡田 (1992) は、評価懸念得点の高さは、周囲の様子に気を配りながら周囲にほど良く合わせることができる適応の柔軟性を有していると考えられることもできると指摘している。宮前 (2008) も同様に、評価懸念の高い子どもは、一見すると適応がよく、社交性も周囲から高く評価されているケースが多いことを指摘している。

評価懸念・対人不安・社交不安障害の形成要因

前述した通り、評価懸念の形成要因に関する研究は少ない。したがって、本稿では、評価懸念だけでなく、対人不安や社交不安障害の形成要因に関する知見も紹介し、これらの知見が評価懸念にも適用可能かどうかという視点も含めて整理していくこととする。ここでは、先行研究で取りあげられることの多い代表的な要因であり、評価懸念の形成要因としても論じられる、気質、養育態度、対人経験を取りあげる。

気質

不安障害の生起にとって重要な要因の一つとして、行動抑制的気質 (behavioral inhibition) が挙げられる (James, Cowdrey, & James, 2012)。Gray (1978) は、不安は行動抑制システム (behavioral inhibition system: 以下 BIS とする) の活動によって生じるとし、BIS は罰や新奇の刺激によって活性化され、現在進行中の行動の抑制や、環境刺激に対する注意の増加につながると説明した。山形・高橋・木島・大野・安藤 (2011) は、BIS が不安や抑うつに影響を与える、つまり BIS が不安や抑うつの素因である可能性を明らかにしており、McClure & Pine (2006) も、見知らぬ人に対する行動抑制は、のちの対人不安と関連することを指摘している。

一方、Asendorpf (1990, 1993) は、行動抑制的気質は見知らぬ人に対する不安とは関連するが、評価懸念とは関連せず、仲間との関係の質が、クラスなどなじみある場所における社会的抑制や評価懸念の程度を予測するとしている。Teachman & Allen (2007) も同様に、評価懸念においては、抑制的気質よりも仲間との相互作用に焦点を当てた介入方法の方が有用であると主張している。前述した通り、評価懸念は、回避行動の頻度や不快経験の有無とは明確に区別される (Watson & Friend, 1969)。行動抑制的気質には、回避行動が含まれているため、認知的要因である評価懸念の生起を直接説明する要因としては影響力が弱い可能性が考えられる。

養育態度

McClure & Pine (2006) によれば、養育態度は、子どもの不安の発達の背景にあるメカニズムであると考えられてきた。社交恐怖を持つ青年や成人が回想する養育態度としては、拒絶、過保護、暖かさの低さが明らかにされている (Arrindell, Kwee, Methorst, van der Ende, Pol, & Moritz, 1989; Lieb, Wittchen, Höfler, Fuetsch, Stein, & Merikangas,

2000)。14～17歳を対象とした Lieb et al. (2000) は、過保護的な養育態度は子どもの自律性とコンピテンスを下げるとともに、社会的状況に参加することを妨げ、結果として社会的スキルを学習する機会を制限すると考察している。なお、評価懸念と養育態度との関連については、評価懸念と子ども時代から受けてきた不承認の量が関連していることが示唆されている (Watson & Friend, 1969)。6～12歳の子どもの対象に縦断研究を行った Allaman, Joyce, & Crandall (1972) も、拒絶的な養育を受けてきた子どもは、他者からの評価を気にするとともに望ましい評価に対する期待が低くなり、それが評価懸念へ結びつく恐れがあることを指摘している。また、大学生を対象とした Koydemir-Özden & Demir (2009) では、両親の厳しさ/監督が評価懸念と正の関連を示すことが分かっている。以上のことから、対人不安や社交不安障害と同様に、評価懸念の生起においても養育態度は何らかの影響を及ぼすと考えられる。

一方、養育態度が不安の生起に及ぼす影響は小さいとの主張も存在する。McLeod, Wood, & Weisz (2007) が子どもの不安に関する研究のメタ分析を行った結果、子どもの不安症状に関して、拒絶は4%、統制は6%の説明率であった。同様に、James et al. (2012) も、養育態度の過保護と暖かさの低さは、子どもの不安症状の4%しか説明していないことを明らかにしている。ただし、より詳細な次元として取り上げられた養育態度である自律性の尊重は18%の説明率であったことから、James et al. (2012) は養育態度の説明率の低さの原因として取り上げられた養育態度の次元の問題を指摘し、より詳細な下位次元であれば、強い影響を示すのではないかと考察している。したがって、今後は、より詳細な養育態度を取りあげた研究の蓄積が求められると言える。

対人経験

山本・田上 (2003) は、友人関係におけるトラブルなどの傷つき経験が評価懸念の形成に影響する可能性を指摘している。山本・田上 (2003) によると、面接調査において傷つき経験を語った大学生の多くは、中学生時代の評価懸念が平均的な値を上回っていたことから、他者から傷つけられたという感情・認知が、評価懸念が高まるきっかけの一つとなると考察されている。傷つき経験が評価懸念に結びつく背景については、傷つき経験によって自分の居場所を失うことに不安を感じると、評価の基準が他者依存的に偏り、自己発達の過程が停滞するために評価

懸念が高い状態で維持されるのではないかと考えられている(山本・田上, 2003)。

なお、評価懸念の生起に結びつく恐れのある傷つき経験には、どのようなものがあるのだろうか。Storch, Crisp, Roberti, Bagner, & Masia-Warner (2005) は、仲間からの拒絶が対人不安の発展と関連することを明らかにしている。また、いじめの被害経験と対人不安との間に関連があることが示されており(McCabe, Antony, Summerfeldt, Liss, & Swinson, 2003)、からかいやいじめの被害は、社交不安障害の生起に一定の役割を果たす可能性があると言える(Brook & Schmidt, 2008)。評価懸念との関連についても検討がなされており、仲間から無視されている子どもは、他児よりも高い対人不安と評価懸念を報告している(La Greca et al., 1988)。また、Teachman & Allen (2007) も、仲間との社会的行動と社会的受容の認知は、思春期の評価懸念に対する重要な予測要因であると主張している。

対人不安・社交不安障害の生起プロセスモデル

本稿では、子どもが不安障害や社会恐怖に至るプロセスモデルを提唱したものとして、Brumariu & Kerns (2010)、Manassis & Bradley (1994)、Morris (2001)、Rubin, Coplan, & Bowker (2009) を紹介する。

まず、複数の要因を扱いながらも、発達初期の親子関係を重視したモデルとして Brumariu & Kerns (2010) が挙げられる。このモデルでは、児童期の不安の起源は親子関係の機能不全であると仮定されている。まず、不安定なアタッチメントと統制的・過保護的な養育態度の相互作用の結果、子どもの統制感や自己効力感の低さ、情動調整の困難などが生じる。さらに、子ども自身の持つ行動抑制的気質、両親の不安、ストレスなどの影響を受けて児童期に不安が生じるという。このモデルでは、アタッチメントと養育態度の相互作用によって不安の芽が生まれ、子ども側の要因や環境要因の影響を受けて不安症状に発展すると主張されている。

一方、Manassis & Bradley (1994) は、先行研究における子どもの不安障害の発達モデルを、気質の影響を強調したモデルと早期の母子関係の影響を強調したモデルの2つに整理した上で、これらを合わせた統合モデルを提唱した。統合モデルでは、子どもが抑制的な気質であっても、母子関係が安定したものであれば不安障害に至る可能性は減ると考える。反対に、子どもの気質が抑制的でなくとも、母子間のアタッチメントが不安定である場合には、不

安障害に至る可能性があるとしている。さらに、発達課題や外傷の体験などの文脈的要因の影響も考慮し、不安定な内的状態にある時にこれらに直面すると、不安障害に至る可能性が高まることを推察している。このモデルは、子ども側の要因と母親側の要因の相互作用を重視しており、原因を単一の要因に求める考え方から脱却するものであった。

同様に、複数の要因の相互作用の影響を重視したモデルとして Morris (2001) が提唱した社交不安障害の発達に関する探索的モデルが挙げられる。Morris (2001) は、先行研究の多くは単一の要因が独立して働くことを仮定しており、児童期の不安が発達、維持、軽減していく過程を理解するために必要な発達精神病理学的な視点が欠如していると指摘した。さらに、児童期の不安障害の研究は成人に適用されてきた理論を援用して解釈されるのみであり、発達の複雑性については考慮されてこなかったと述べている。これらの指摘を踏まえて Morris (2001) が提唱したこのモデルは、本人の気質だけでなく家族プロセスや仲間関係を含んだ発達のモデルであり、症状のきっかけ(entry points)は個人によって異なると考えられている点が特徴である。つまり、抑制的な気質でなく親との関係も良好であっても、発達の過程で仲間関係を契機に社交不安障害に至る者がいるということを仮定しているのである。Manassis & Bradley (1994) が母子の相互作用を中心に説明したのに対し、Morris (2001) はさらにその範囲を広げ、仲間関係などの社会的文脈の働きを重視したと言えるだろう。

さらに、乳幼児期から思春期前期にかけて複数の要因が作用するプロセスを取りあげたものが Rubin et al. (2009) のトランザクショナル・モデルである(Figure 1)。このモデルは、引込み思案行動(social withdrawal)と対人不安の発達を説明するものとして提唱され、時間軸に沿ってその時期特有の要因の相互作用のあり方が整理されている。例えば、乳幼児期から就学前までは、子どもの気質と養育態度が関連しあい、子どもの抑制的行動や社会的スキルの不足、否定的な自己認識の芽生えなどにつながっていく。さらに、児童期以降になると、養育態度だけでなく仲間関係が加わる。養育態度、仲間関係、これまでの発達過程で形成された子ども自身の引込み思案行動や否定的な自己認識が相互に作用した結果、やがて対人不安などの内在化問題に至ると述べられている。Morris (2001) のように社会的文脈も考慮しただけでなく、それぞれの時期に特有と考えられる養育態度や仲間関係のあり方が詳細に記述されている点がこのモデルの特徴であると言

えるだろう。

先行研究におけるこれらのモデルを踏まえ、評価懸念の生起に関するプロセスモデルを検討する際にも、社会的文脈を含む複数の要因を取りあげるほか、その時期特有の要因の働きや相互作用のあり方を考慮する必要があるのではないだろうか。

今後の課題と展望

本稿では、評価懸念の形成プロセスの検討を目的として、評価懸念に関する研究の動向を概観し、対人不安や社交不安障害の形成プロセスに関するモデルを整理してきた。最後に今後の課題と展望について述べることにする。

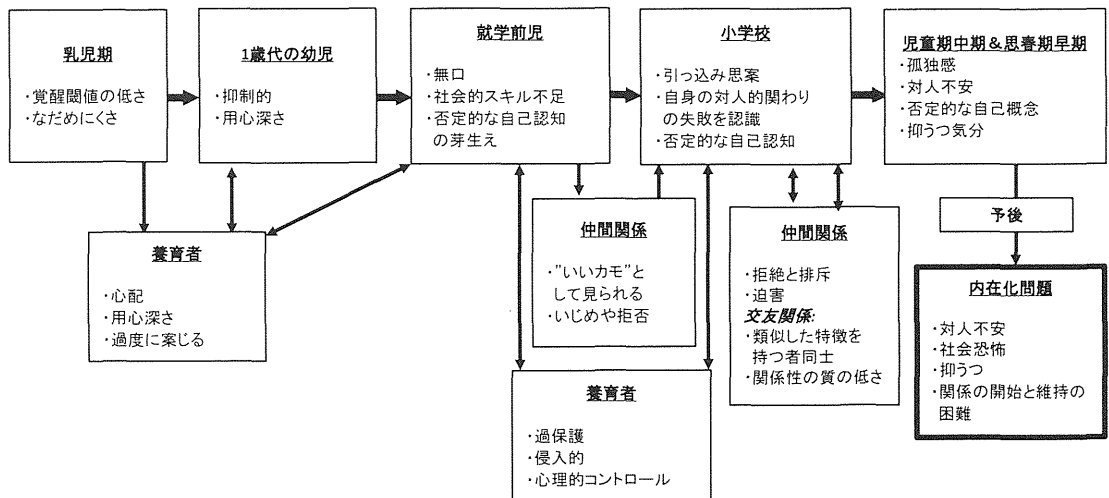
評価懸念の形成要因やそのプロセスに関する研究は、今後更なる知見の蓄積が必要な領域であると考えられる。これまで対人不安や社交不安障害に関する知見やモデルがいくつか提唱されてきたが、それらを評価懸念にそのまま適用できるかどうかについては、慎重に検討する必要があると言えるだろう。その理由として、既存のモデルでは、不安症状の生起に気質の影響が必ず仮定されている点が挙げられる。前述した通り、評価懸念の程度を予測する要因は気質よりも仲間との関係の質の方が重要である可能性が指摘されている (Asendorpf, 1990, 1993; Teachman & Allen, 2007)。したがって、行動的要素を含まない評価懸念においては、対人不安や社交不安障害とは異なる形成プロセスが存在している可

能性も考えられる。また、先行研究のモデルがどのような年代を対象として考案されたものなのかについても、十分に考慮する必要がある。つまり、対人不安や社交不安障害、あるいは成人に適用されてきたモデルをそのまま適用するのではなく、評価懸念が生起する時期と考えられる児童期後期から思春期にかけての発達の特徴を考慮した、評価懸念に特有の形成プロセスを新たに記述する必要があるのではないだろうか。

一方、複数の要因を包括的に取りあげる点や仲間関係などの社会的文脈を考慮する点など、先行研究のモデルから評価懸念のモデルにも取り入れるべき有用な視点が得られることは確かである。特に、児童は親、教師といった環境に依存して影響を受けており、児童の不安症状には周囲の環境が関連している可能性がある (石川・坂野, 2005)。評価懸念の発達的変化を考慮すると、評価懸念の形成モデルを検討する際には、子どもを取り巻く社会的文脈を含める必要性が十分に考えられる。

従来の研究では、評価懸念を高めるような要因が検討されることが多かった。しかし、どのような要因があれば評価懸念が高まらずに済むのかというポジティブ心理学的な観点から、評価懸念の形成に影響を与える要因を検討することも考えられる。この観点を導入することによって、本人や家族を責めることを避け、具体的で未来志向的な介入方法の検討につながる事が期待できるだろう。

さらに、山本・田上 (2001a) は、評価懸念の高



Rubin, Coplan, & Bowker (2009) を翻訳

Figure 1. ルビンのトランザクショナル・モデル

さが他者配慮的な行動に結びつくとすれば、それはある程度、環境によって重んじられる特性であるかもしれないと考察している。評価懸念の持つ適応的側面を考えると、単に評価懸念を低減すれば不適応問題が防げるとは言い切れない恐れがある。つまり、評価懸念は、他者配慮的行動など他の変数との結びつきによっては適応的に働く可能性も秘めていると言えるだろう。今後、評価懸念の形成プロセスや介入について検討する際には、どのようにしたら評価懸念が適応と結びつくのか、そのメカニズムを解明する必要ことも期待される。

引用文献

- Allaman, J.D., Joyce, C.S., & Crandall, V.C. (1972). The antecedents of social desirability response tendencies of children and young adults. *Child Development*, **43**, 1135-1160.
- Appleton, P. (2008). A developmental framework for understanding children's anxiety. In P. Appleton (Ed.), *Children's anxiety: A contextual approach*. East Sussex: Routledge. pp.3-39.
- Arrindell, W.A., Kwee, M.G.T., Methorst, G.J., van der Ende, J., Pol, E., & Moritz, B.J.M. (1989). Perceived parental rearing styles of agoraphobic and socially phobic in-patients. *British Journal of Psychiatry*, **155**, 526-535.
- Asendorpf, J.B. (1990). Development of inhibition during childhood: Evidence for situational specificity and two-factor model. *Developmental Psychology*, **26**, 721-730.
- Asendorpf, J.B. (1993). Beyond temperament. In K.H. Rubin, & J.B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.265-289.
- Brook, C.A., & Schmidt, L.A. (2008). Social anxiety: A review of environmental risk factors. *Neuropsychiatric Disease and Treatment*, **4**, 123-143.
- Brumariu, L.E., & Kerns, K.A. (2010). Parent-child attachment and internalizing symptoms in childhood and adolescence: A review of empirical findings and future direction. *Development and Psychopathology*, **22**, 177-203.
- Buss, A.H. (1986). *Social behavior and personality*. New York: Lawrence Erlbaum Associates. (バス, A.H. 大淵憲一 (監訳) (1991). 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Clark, D.M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R.G. Heimberg, M.R. Liebowitz, D.A. Hope, & F.R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press. pp.69-93.
- Collins, H.A., Westra, H.A., Dozois, D.J.A., & Stewart, S.H. (2005). The validity of the brief version of the fear of negative evaluation scale. *Journal of Anxiety Disorders*, **19**, 345-359.
- Daleiden, E.L., & Vasey, M.W. (1997). An information-processing perspective on childhood anxiety. *Clinical Psychology Review*, **17**, 407-429.
- Gilbert, N., & Meyer, C. (2005). Fear of negative evaluation and the development of eating psychopathology: A longitudinal study among nonclinical women. *International Journal of Eating Disorders*, **37**, 307-312.
- Gray, J.A. (1978). The neuropsychology of anxiety. *British Journal of Psychology*, **69**, 417-437.
- Gullone, E., King, N.J., & Ollendick, T.H. (2001). Self-reported anxiety in children and adolescents: A three-year follow-up study. *Journal of Genetic Psychology*, **162**, 5-19.
- Hartmann, T., Zahner, L., Pühse, U., Schneider, S., Puder, J. J., & Kriemler, S. (2010). Physical activity, bodyweight, health and fear of negative evaluation in primary school children. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports*, **20**, 27-34.
- 堀井俊章・卯月研次・小川捷之 (1995). 青年期の対人不安意識に関する研究 心理臨床学研究, **13**, 215-221.
- 石川信一・坂野雄二 (2005). 児童における不安症状と行動的特徴の関連—教師の視点からみた児童の社会的スキルについて— カウンセリング研究, **38**, 1-11.
- 石川利江・佐々木和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本語版標準化の試み 行動療法研究, **18**, 10-17.
- James, A., Cowdrey, F., & James, C. (2012). Anxiety disorders in children and adolescents. In P. Sturmey, & M. Hersen (Eds.), *Handbook of evidence-based practice in clinical Psychology*. Vol.1. *Child and adolescent disorders*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons. pp.545-557.
- 柏木恵子 (1983). 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- Kendall, P.C., Krain, A., & Treadwell, K.R.H. (1999).

- Generalized anxiety disorders. In R.T. Ammerman, M. Hersen, & C.G. Last (Eds.), *Prescriptive treatments for children and adolescents (2nd ed.)*. Boston: Ally & Bacon. pp.155-172.
- Kinoshita, Y., Kingdon, D., Kinoshita, K., Kinoshita, Y., Saka, K., Arisue, Y., Dayson, D., Nakaaki, S., Fukuda, K., Yoshida, K., Harris, S., & Furukawa, T. A. (2011). Fear of negative evaluation is associated with delusional ideation in non-clinical population and patients with schizophrenia. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, **46**, 703-710.
- Kocovski, N.L., & Endler, N.S. (2000). Social anxiety, self-regulation, and fear of negative evaluation. *European Journal of Personality*, **14**, 347-358.
- Koydemir-Özden, S., & Demir, A. (2009). The relationship between perceived parental attitudes and shyness among Turkish youth: Fear of negative evaluation and self-esteem as mediators. *Current Psychology*, **28**, 169-180.
- La Greca, A.M., Dandes, S.K., Wick, P., Shaw, K., & Stone W.L. (1988). Development of the social anxiety scale for children: Reliability and concurrent validity. *Journal of Clinical Child Psychology*, **17**, 84-91.
- La Greca, A.M., & Lopez, N. (1998). Social anxiety among adolescents: Linkages with peer relations and friendships. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **26**, 83-94.
- La Greca, A.M., & Stone, L.W. (1993). Social Anxiety Scale for Children-Revised: Factor structure and concurrent validity. *Journal of Clinical Child Psychology*, **22**, 17-27.
- Leary, M.R. (1983a). *Understanding social anxiety: Social personality and clinical perspectives*. Newbury Park, CA: Sage Publications. (リアイ, M.R. 生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- Leary, M.R. (1983b). A brief version of the Fear of Negative Evaluation Scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 371-375.
- Lieb, R., Wittchen, H.U., Höfler, M., Fuetsch, M., Stein, M.B., & Merikangas, K.R. (2000). Parental psychopathology, parenting styles, and the risk of social phobia in offspring. *Archives of General Psychiatry*, **57**, 859-866.
- Manassis, K., & Bradley, S.J. (1994). The development of childhood anxiety disorders: Toward an integrated model. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **15**, 345-366.
- McCabe, R.E., Antony, M.M., Summerfeldt, L.J., Liss, A., & Swinson, R.P. (2003). Preliminary examination of the relationship between anxiety disorders in adults and self-reported history of teasing or bullying experiences. *Cognitive Behaviour Therapy*, **32**, 187-193.
- McClure, E.B., & Pine, D.S. (2006). Social anxiety and emotion regulation: A model for developmental psychology perspectives on anxiety disorder. In D. Cicchetti, & D.J. Cohen (Eds.), *Developmental Psychopathology*. Vol.3. *Risk, Disorder, and Adaptation*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons. pp.470-502.
- McLeod, B.D., Wood, J.J., & Weisz, J.R. (2007). Examining the association between parenting and childhood anxiety: A meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, **27**, 155-172.
- 宮前淳子 (2008). 思春期における他者意識と評価懸念との関連 日本教育心理学会第50回総会発表論文集. 735.
- Morris, T.L. (2001). Social phobia. In M.W. Vasey, & M.R. Dadds (Eds.), *The developmental psychopathology of anxiety*. New York: Oxford University Press. pp.435-458.
- Morris, T.L., & Ale, C.M. (2011). Social anxiety. In D. McKay, & E.A. Storch (Eds.), *Handbook of child and adolescent anxiety disorders*. New York: Springer. pp. 289-301.
- 内閣府 (2000). 青少年の社会的適応能力と非行に関する研究調査 共生社会政策 平成13年9月 <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/tekiou_g/top.html> (平成26年3月12日)
- 内閣府 (2010). 第4回非行原因に関する総合的研究調査 共生社会政策 平成22年3月 <<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/gaiyou/gaiyou.html>> (平成26年3月12日)
- O'Connor, L.E., Berry, J.W., Weiss, J., & Gilbert, P. (2002). Guilt, fear, submission, and empathy in depression. *Journal of Affective Disorders*, **71**, 19-27.
- Oei, T.P.S., Kenna, D., & Evans, L. (1991). The reliability, validity and utility of the SAD and FNE scales for anxiety disorder patients. *Personality and Individual Differences*, **12**, 111-116.

- 岡田守弘・渡田典子 (1992). 評価懸念および自己制御感から観た児童の学校不適応感の測定について 横浜国立大学教育紀要, **32**, 151-187.
- 岡島 義・福原佑佳子・山田幸恵・坂野雄二・La Greca, A.M. (2009). Social Anxiety Scale for Children-Revised (SASC-R) と Social Anxiety Scale for Adolescents (SAS-A) 日本語版の作成 児童青年精神医学とその近接領域, **50**, 457-468.
- Ollendick, T.H., King, N.J., & Frary, R.B. (1989). Fears in children and adolescents: Reliability and generalizability across gender, age, and nationality. *Behaviour Research and Therapy*, **27**, 19-26.
- Phillips, B.N. (1963). Age changes in accuracy of self-perceptions. *Child Development*, **34**, 1041-1046.
- Rapee, R.M., & Heimberg, R.G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **35**, 741-756.
- Rubin, K.H., Coplan, R.J., & Bowker, J.C. (2009). Social withdrawal in childhood. *Annual Review of Psychology*, **60**, 141-171.
- 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み—項目反応理論による検討— 行動療法研究, **30**, 87-97.
- Schlenker, B.R., & Leary, M.R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- Spence, S.H. (1994). Practitioner review: Cognitive therapy with children and adolescents: From theory to practice. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **35**, 1191-1228.
- Storch, E.A., Crisp, H., Roberti, J.W., Bagner, D.M., Masia-Warner, C. (2005). Psychometric evaluation of the social experience questionnaire in adolescents: Descriptive data, reliability, and factorial validity. *Child Psychiatry and Human Development*, **36**, 167-176.
- 菅原健介 (1996). 対人不安と社会的スキル 相川 充・津村俊充 (編) 対人行動学研究シリーズ 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する 誠信書房
- Teachman, B. A., & Allen, J. P. (2007). Development of social anxiety: Social interaction predictors of implicit and explicit fear of negative evaluation. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **35**, 63-78.
- Turk, C.L., & Heimberg, R.G. (1998). An investigation of gender differences in social phobia. *Journal of Anxiety Disorders*, **12**, 209-223.
- Warren, R., Good, G., & Velten, E. (1984). Measurement of social-evaluative anxiety in junior high school students. *Adolescence*, **19**, 643-648.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.
- Westenberg, P.M., Drewes, M.J., Goedhart, A.W., Siebelink, B.M., & Treffers, P.D.A. (2004). A developmental analysis of self-reported fears in late childhood through mid-adolescence: Social-evaluative fears on the rise? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **45**, 481-495.
- 山形伸二・高橋雄介・木島伸彦・大野 裕・安藤寿康 (2011). Gray の行動抑制系と不安・抑うつ—双生児法による4つの因果モデルの検討— パーソナリティ研究, **20**, 110-117.
- 山本淳子・田上不二夫 (2001a). 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究, **39**, 37-46.
- 山本淳子・田上不二夫 (2001b). 評価懸念尺度の作成 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 180.
- 山本淳子・田上不二夫 (2003). 思春期における対人経験と評価懸念との関連—自伝的記憶による探索的検討— 教育相談研究, **41**, 21-38.
- 山本淳子・田上不二夫 (2007). 思春期における評価懸念と承認欲求との関連 カウンセリング研究, **40**, 116-126.

(受稿 3月31日: 受理 5月29日)